

になお掠め盗られ、ソ連軍から日本婦人が眼前で犯されているのに手も足も出すことのできない敗戦国民のみじめさを、二度とあつてはならないと涙を流した則竹次郎氏の真髓を永遠に語り継ぐべきであろう。

(社引揚者団体全国連合会)

副理事長 結城 吉之助)

生きる

岐阜県 後 藤 英 子

幼年時代

私の父は満鉄に勤めていました。発展途上にあつた満州は、学校も、病院も、地方事務所(市役所)なども皆満鉄が経営してました。父は、地方事務でした。いろいろな施設を作つては次々と転動しましたので、私たちもついて回り、今では満州中が懐かしい思い出の地となっています。

私は、大正八年一月二日に公主嶺で生まれました。

兄妹八人いますが、他の兄妹は皆父の転勤先で生まれ、同じ所で生まれたのは兄と私の二人きりです。杜宅は黒っぽいレンガのロシヤふう建ての家で、家のまん中に大きなベチカがありました。毎朝冬は、燃えガラの出し、薪をくべ石炭を上手に乗せる。上の広くなつた石炭バケツに二杯くらい、上手に次々とくべる。真つ赤に燃えた所に、下の灰をかぶせベチカの火が通る途中にあるかねの板を少しガスが抜ける程度に閉めるのがコツです。閉めてしまうとガス中毒を起こすし、開けておくとすぐ冷えてしまうので、日本から来たばかりの方は覚えるまで苦労していましたが、上手になると、マイナス三〇度を超す真冬でも部屋中、春のようにポカポカです。おこたとか火鉢は引き揚げて来てから物珍しく使いましたし、日本の冬の家の中の寒いには閉口しました。何しろ父の転勤が多かつたこと。でも楽しい思い出がたくさん残っています。兄弟姉妹は八人いましたが、満人のお手伝いさんの女の人と若いボーイさんが、お掃除やお洗濯を手伝ってくれましたので、母は大助かりでした。八人の子供たちの服も

セーターも、皆母の手作りで着せてもらいましたので、見よう見まねで覚え、私も引き揚げてから、子供の物はもちろんのこと近所の方の服を縫わせていただき、生活の足しにしました。

小学校入学と卒業

小学校は長春で入学し、間もなく近くの范家屯という小さな分教所に転校し、そこは四年生まで、五、六年のときは公主嶺に汽車通学でした。初めは鉄道の北側にあるロシア建ての民家の二部屋。一部屋に一、二年生、もう一部屋に三、四年生と入り、一年生の授業のときに二年生は宿題とか自習でした。皆、仲良くだれが何年生だか思い出せないくらい一緒に学び、一緒に遊んでいました。後に鉄道の南側に立派な広い学校が建てられ、お祝いするとき、学芸会があり、私たちは「浦島太郎」の劇をし、私は乙姫様の役で、女の先生の赤い長じゅばんを借り、赤いお裁縫箱を玉手箱にして楽しく演じた思い出があります。

次に三年生のとき、営口に転校しました。とても大きな二階建ての校舎で驚きました。男女一緒に、教専

卒の若い立派な先生で、学級委員にも選ばれ楽しく学びました。「遼河」という大きな川があり軍港になっていた、時々駆逐艦が入り、見学に連れて行っていたこともありました。時々岸に蜃気楼が見えるので、一度見に連れて行っていただいたこともありました。

そして五年生のとき、鉄嶺に転校しました。鉄嶺も満州八景の一つの「龍首山」・「龍尾山」があり景色のよい所で、町も学校も大きく落ち着いた町でした。ここでは男女別のクラスでした。スポーツが好きで陸上の選手にもなり、スパイクの音も気持ちよく、グラウンドを走ったものでした。また、龍尾山へのマラソンもあり、私は四位になって、表彰台に立ったまでは覚えていますが、気がついたら医務室のベットに寝ていたようなこともありました。ようやくこの鉄嶺小で六年を卒業しました。

女学校入学

そのころ女学校に行く人はクラスの中で三、四人しかいませんでした。奉天高等女学校（後に浪速高女と

なる)に入学、寄宿舎生活を五年しました。学校は赤レンガの三階建ての立派な学校でした。寄宿舎は廊下続きでしたので登下校は楽でした。

満州事変

突如として起こった夜中の爆音に驚き飛び起きた私たちでした。何事が起きたのか分かるはずもなく、ただおろおろするばかりでしたが、後から先生に北大営を爆破し、満州事変が起こったことを知らされました。その一週間後には、私たちは護衛つきで北大営に遠足がありました。線路わきにまだ中国兵の死体が幾つか置いたままになっていて、兵舎の中は乱れたままのひどい散らかりようでした。遠足どころの気分ではありませんでした。町の中は軍隊が行き来し、何か物々しく思いましたが、私たちの生活は何んら変わりはありませんでした。

叔父の死

私の父のたった一人の弟は、開けて行く満州の奥地へ鉄道を敷く仕事をし、満人を何百人か使って監督をしていました。昭和六年七月三十日の夜、紅槍匪とい

う馬賊が長い柄に紅い房をつけた鉄の槍を持ち、何千人という大群で大声で呪文を叫びながら押しよせて来たのです。皆、馬に乗って来たのでどうすることもできず、叔父は胸を三方所突かれ殺されました。紅槍匪は人間は三回以上突かないと死なないと教えられているのだそうです。満州建設のためとはいえ気の毒な叔父の悲しい一生でした。

修学旅行

まだ世の中が余り騒がしくなかったのでしょうか。私たちは、女学校四年生のとき、日本へ二十一日間の修学旅行に連れて行ってもらいました。今でいう海外旅行です。初めて見る父母の生まれた日本。私たちの国日本。初めて上陸した日本。松の緑、山々の緑がすばらしく美しく目に映りました。川の流れの澄んでいること、蒼ぶきの家が珍しく、祖国日本ってすばらしいなと思いましたが、上手をしている人、農業をしている人が皆日本人なので、それも驚きました。人の多いこと、駅から駅まで家はずっとあること、汽車が小さいこと、夕陽が山や屋根に沈むことも不思議にさえ思

えました。でも、ぜいたくな修学旅行をさせてもらいました。日光まで行きました。

母の死

私の卒業後、母は心臓病で私が二十歳のとき、四十五歳で他界しました。そして数年後に義母が来しました。父は定年で退職し、郷里の別府へ帰りました。

結婚して佳木斯へ

昭和十六年に早稲田卒の主人（義母の姉の長男）と結婚し佳木斯へ住むことになりました。

スガリーの流れる静かな町でした。

主人は軍関係の自動車の会社の事務へ勤めていました。昭和十七年に長女が生まれ、十九年に次女が生まれ、にぎやかになりました。冬はマイナス三〇度は軽く超しますので、買物などは大変ですが、外の倉庫は冷凍庫になるので便利です。お餅でもついたはしから外のござの上に置けば、即、冷凍できますので、缶に入れ外の倉庫に入れ保存しました。

チチハルへ転勤

昭和十九年秋に、主人は北の奥の方のチチハルに転

勤になりました。寒い所ですが食べ物も不自由しませんし住みよい町でしたが、忘れられない地となりました。まいました。

ソ連参戦

終戦ほんの間近になりソ連は参戦し、陸続きの国境に近いチチハルには、いち早く戦車で侵入して来ました。最前線には囚人兵とかで見るからに人相の悪い兵たちで、勝手に鍵を壊して、土足のまま銃を向けて、「ダワイ、ダワイ」と言いながら家の中を物色し、時計や万年筆をとっても喜んで取って行きました。彼らは一体どんな生活をしていたのでしょう。幾つも腕時計をはめて喜んでいたり、壊れているのでも喜んで持つて行きました。私たちは恐ろしくて子供たちをしっかりと抱き、部屋の角に小さくなつてされるがままに見ているより仕方がありませんでした。あるときは、「男は皆外へ出る!!」と言いつ張り出し、調べていました。武器の取り上げです。私たちは恐ろしさのあまり、かねてから用意してあった天井裏へ押入れから梯子で上り、梯子を上引き上げ、蓋たかをして分からない

いようにし、じっと成り行きをうかがっていました。

天井裏には、いつでも隠れられるように食料、その他を用意してありました。幼い子供がいますので、泣いたり騒いだりするとみつきり殺されてしまうので、静かになだめすかしながら時を待ちました。無事解放されたときの喜びは言うまでもありません。主人の会社の人たちには召集された人はありませんでしたが、八月八日ごろ会社の三役を残してほとんど一時に召集され戦地へ向かいました。ちよつと不安な気持ちになりました。主人はその三役の内に入っていたので召集は免れました。

レンガ塀で囲まれた社宅には、奥地から逃げて来られた開拓団の方たちに半分空けて入ってもらいましたので、私たち社員は、二、三家族同居することになりました。召集されて残された家族の方たちは気の毒なので、一足先に南下してもらうことにし、ハルビンへ向かって行ってもらいましたが、ハルビンより先は行けないとのことで、また戻ってこられました。収容所での子供さんたちは病気になる、ほとんどが亡くな

ってしまい寂しく帰ってこられました。

終戦

社宅で、我が家になつた一つ残されたラジオの前に皆集まりました。重大ニュースがあるという知らせにかたずをのんで待つていた皆に聞こえてきたのはあの大本営発表の「玉音放送」でした。聞いていた人たちは初めは何のことかはつきり分かりませんでした。が、「日本が負けた」ということが分かると思ひの上のにぎりこぶしが震え出し、すすり泣きの声が聞こえ始めました。こんなことであるのだろうか。耐えに耐え一致団結して戦つたのに。そして、これから先我々はどうなるのだろうか、と力が抜けてしまいました。負けたのならもうこの地に住むことはできないでしょうし、どうやって日本へ帰つたらよいのだろうか、と皆の気持ちは同じでした。そのうちラジオも持つて行かれ日本の状況は全く分からず、ただ何か恐ろしい爆弾が落とされ大きな被害があったらしいということしか分かりませんでした。ソ連兵の侵入も余りなくなつたころから、日本人は衣類などの「売り食い」を始めま

した。恐る恐る町へ持つて行つて食料と換えるのです。私は帯の芯で当時はやって来たハンチング（鳥打帽子）を作り、主人に町へ売りに行つてもらいました。

案外よく売れましたが、材料がなくなり、できなくなりました。その後主人たち二、三人で何か少し、仕入れては売りに行きましたが、商売の経験のない者には無理なことでした。そのうち、元の会社はソ連に没収されて元の従業員は働かしてもらえませんでしたので少し助かりました。

銃を突きつけられて

ある日、突然二、三人のソ連兵が侵入して来て、私の胸に銃を突きつけて、満人を通訳にし、「ピストルを出せ。今すぐ出せ。出さないと殺すぞ」と物凄く剣幕に私は驚いて立ちすくみました。血の気が下がるとはこのことをいふのでしょうか。少し間をおいて落ちついたとき、子供たちをどうしよう。ということが頭の中をよぎりました。私はようやく気を取り戻し、「家にはピストルはありません。本当です。家中探して見てください」と言うところを探していましたが、本

当にあるはずがありません。締めたのか、「また明日来るから出しておかないと殺すぞ」と恐ろしいセリフを残して出て行きました。ふとそのとき、外に隠れるように待っていた日本人がいました。同じ会社の人でした。案内をさせられたのでしよう。我が身かわいさに、何か少しわびしい気がしました。

私は同居している方に、「もし明日私が連れて行かれたり殺されたりしたら、子供たちをお願いしますね」とくれぐれも頼み覚悟を決めて翌日を待ちました。でも幸いソ連兵は来ませんでした。ピストルは無いと思つたのでしよう。子供たちを抱きしめて、よかつた命が助かつた。と座り込んでしまいました。でもまだまだ何をされるか分からない恐怖の毎日でした。

窓には皆、板を打ちつけ、ガラスを割つて侵入されないようにと、一年間、日の当たらない部屋におびえて過ごした毎日でした。電灯も付かなくなり水道も水が出なくなりました。ローソクをつけ、水は杜宅の角にある井戸までくみに行くのです。夏の間はまだよかつたのですが、寒くなると井戸の周りがかむとときにこ

ぼれた水が凍って山のようになり、滑って危ないので、苦勞してくみました。

いよいよ引揚げ

一年間の恐ろしい生活を過ごし、昭和二十一年八月二十日「日本人は三日以内に立ち退け」との通達がありました。さあ、これで日本に帰られる、という嬉しさ、道中の治安と、何日かかったら日本へ着くのかという不安でした。でもともかく出発の準備をしなければと急いで用意を始めました。かねてから作ってあった一人一人のリュックサックの中に食料、衣類、薬などを入れました。食料はなるべく軽くて腐らない物を作って置きました。干飯、干しパン、乾パン、干いも、ニンニクのみそ漬けなどを各自に分けて入れました。私は当時七カ月の身重の体でしたので、万一の事を考え出産用品と赤ん坊の物一揃えを入れました。写真、貴重品は一切持って帰ることはならない、というきつにお達しに皆置いてきました。ただ、生きて日本へ帰りたい一心で生きるための物のみを持って行くことにしました。

日本へ向かい南下出発

昭和二十一年八月二十三日朝、空が白みかけたころ、体には着られるだけの物を着て、子供たちには私の防寒コートでオーバーを二枚作ってありましたので、それも着せ、荷馬車に乗りガタゴトと揺られながらチチハルの駅に向かいました。

持っていた汽車は材木などを乗せる無蓋車でした。そして着いた順に本当に荷物のようにどんどん積み込まれ、座ったら座ったまま身動きもできない有様。そしていつぱいになったら動き出すのです。ガタン、と動き出したとき「ああ、これでやっと日本へ帰れる」という喜びと道中のことの不安も交え複雑な気持ちでチチハルを出発しました。ハルビンまでの道のりの長かったこと、途中どこでもおかまいなく止まるのです。すると待っていましたとばかりに満人たちが寄って来て目ばしい物を取って行くのです。負けた者のあわれさ、反抗もできず取られるのをくやしきいっばいで眺めているよりどうしようもないのです。余計なことに手出しをしてせっかく日本に向かっている今、殺され

ては何にもなりません。そして、止まっている間に素早く下りて、恥も外聞もなく草むらに入り用をたして、また梯子を上って車上へ戻るので。日が照ると暑いし、雨が降れば下着までぬれる有様です。汽車が動いている間はまだよいのですが、鉄道が破壊された所は動きません。皆下りて歩くのです。私たちも主人と二人で子供を下ろし、手を引いて皆に遅れまいと歩き始めました。こんなときは、もうだれもが我れがちです。人のことなど考えていられません。でも、そんなとき、そばを歩いていた若いご夫婦の方が、私たちを見かねてか下の二歳の娘をすつと抱いて「おりこうだね、抱いて行ってあげるよ」とかわるがわる抱いたり背負ったりして歩いてくださったのです。地獄で仏とはこのことでしょうか、有り難くて後から手を合わせてついて行きました。涙の流れるままに、どうにか汽車に乗ることができましたが、混乱の中でしたので、お名前も聞かず別れ別れになってしまいました。あのときのごご親切な温かいお心は、五十年たった今も忘れることができません。こうした話を書く度に書かせていた

だき、もしあのときのご夫婦が日本のどこかにお健やかにお暮らしでしたら、この紙上を借りて心から感謝し、お礼を申し上げます。あのときの娘は今も五十二歳になり、二児の母親であり、また孫一人の祖母となり元気に暮らしております。今、娘たち二人は私に言ってくれます。「お母さん私たちの手を引いて連れて帰ってくれて本当に有り難う。残留孤児にならなくてよかった」と。残留孤児の方が肉親を探しに来日されるにつけ、人ごとと思えず、お気の毒でなりません。ハルビン、新京。奉天と、各収容所に入れられ順番を待ちました。

収容所では、DDTの白い粉を頭からかけられ、体育館のように広い所にゴロ寝の所もあり、小さい部屋につめ込まれたり、給食はありました。粟か高粱のおかゆです。粟のときは子供が下痢をして困りました。収容所の周りには有刺鉄線がはりめぐらしてあり外へは出られません。ほかに満人が食べ物売りに来るのです。お金を持って来た人は「まんとう」や「とうもろこし」を買っていました。水は不自由しなくて助か

りました。便所が困りました。作ってありましたが、外の角の方に三十センチばかりの幅の溝が長く掘ってあるだけなのです。初めはためらいましたが、何十日ものことで、しまいには慣れてきて、平気で用をたしてきました。でも不潔なものには閉口しました。お風呂などももちろんありませんので、一つ持ってきたお鍋に水をくんできて、タオルをしぼり子供たちの体を拭いてやるのです。栄養失調で亡くなる子、ハシカやチフスで亡くなる人、奉天では死体を車に積んで運び埋められたと聞きました。三十日余りかかりようやくコロ島に着きました。ここでも消毒され乗船の順を待たため収容所へ入りました。同じような状態で待ちました。ここでは持ち物の検査が厳しかったように思いました。

乗船

わずかに残った荷物を持っていよいよ乗船です。貨物船の船底でした。すのこ板が敷いてあり一家族畳一枚分なので大家族の方たちは気の毒でした。看板上がり日本へ向かう喜びと生まれ故郷をこうしたみじめな姿で、そして再び来ることができないかもしれない

別れをする、心の中は複雑でした。「さよなら故郷」いつまでもいつまでもだれにもなく涙を流しながら手を振り、満州を離れたのでした。船での生活は何日かかったでしょうか。給食はありましたが水のお汁だけしかかゆと実があるかわからないようなお汁だけでした。便所がまた大変でした。看板上なので船底から階段を上がり、また順番待ちで並ぶのです。船中で力つき亡くなった方もあり、日本を目の前にお気の毒に静かに水葬されました。

日本が見えた

「おい、日本が見えたぞー」の声に皆沸き立ち甲板へ上がりました。目に入ったのは、美しい松の緑でした。日本が見えた。本当に帰られるのだ。少ない荷物をまとめ上陸の準備をしました。

日本上陸

二、三日博多の沖に留まり、また検査です。そして上陸できました。チチハルを立つて、四十三日目に日本の土を踏むことができたのです。

主人も共に家族四人そろって、あの博多の栈橋を渡

って日本の土を踏んだ第一歩。そのとき国から一人千円と毛布一枚を支給され、私にとつては外国とも思われる日本での生活の第一歩が始まったのです。あのとき、ずらつと並んでいた小さな屋台店で、ぜんざいを飯盒にいっぱい買いました。薄い小豆色の汁にさつまいもの角切りが少し入っていただけですが、おいしかったです。子供たちと顔を見合わせながら食べたあの味が今も忘れられません。

両親・妹・弟との再会

十月七日の朝早く両親の住んでいた、大分県別府市の亀川の家へ見るもあわれな格好でたどり着きました。家の中から妹たちが飛び出て来て、私たちの突然の帰国に、「生きてたの。帰れてよかったね」後は声にならず、ただ、抱き合つて無事を喜び、有り難さで涙、涙でした。

何十日ぶりで汚れと疲れを温泉で流し、食料もまだ不足中に私たちを迎えてくれたことの喜びと、そして安心したせいか……。

長男出産

翌日十月八日の朝、私は長男を出産しました。両親は二度びつくり。なんという幸せでしょう。途中で生まれたら二人とも生きては帰られなかったでしょう。赤ん坊はやせておへその緒を首に巻いていたそうですが、無事生まれたのです。このときほど神様の力、運命の有り難さを感じたことはありません。

日本での生活

二カ月実家で世話になり十二月十日に珍しく小雪の降る中を、鹿児島県志布志町に住む主人の両親のもとへ行きました。一枚の掛布団と配給の敷布団をもらい、上と下からもぐり込んで寝ました。主人の両親の所にはまだ妹が三人、弟が二人いましたので、私たちが入り大家族になりました。田舎ですので主人の職もありません。父は女学校の校長をしていました。

そのころ岐阜県の大垣で主人の叔父がちょっとした工場を持っていましたので、その事務の仕事にこないかと言われ、大垣に行くことになりました。

大垣に転居

昭和二十二年八月二十二日、志布志を立ち都城まで

は牛や馬を乗せる小さな窓が一つある貨物列車に乗り、日豊線に乗り換えました。汽車は満員で、子供は窓から押し込み、通路も人がいっぱい。新聞紙でも敷いて座れたらよい方でした。窓は開けてあるのでトンネルに入ると煙が入り、皆の顔は真っ黒、大垣に何時間かかって着いたでしょうか。工場は揖斐川町にありますので、近くの農家の小屋を借りて、ひとまず落ち着くことになりました。近所の農家の方が大変親切で、何にもない私たちに火鉢や家具やお布団まで貸してくださったり、野菜の残りなど毎日持って来て助けてくださいました。私も縫物や編物をし、お米と代えていただいたり、人の温かい心にふれ、周りの方に助けられて日本での生活が始まったのです。ところが良いことばかりはありません。叔父の工場は紡績のボピンを作っていました。紡績の不況で倒産してしまい、また失業ということになりました。

県職員に採用される

幸いなことに主人は、昭和三十六年に県職員に採用され、ようやく安定した職につけホッとしました。古

い背広を着て勤めに出て行く主人の後姿に、どうぞこのまま平穩に安定して暮らせようにと手を合わせたのでした。それまでの間に日雇いにも出たこともありましたが。

長女の入学

ランドセルも買ってやれない生活でした。厚い布の帆布がありましたので、ランドセルを作りました。ボール紙の芯を入れ、ふたには油絵で花の絵を画き、緑にピンクとブルーのリボンを飾り、かわいい物ができました。靴も同じ布で、中国の方に靴の作り方を教えていただいたことがありますので応用して作り、服はビロードのカーテンをいただきましたので、ワンピースと帽子をペアで作りました。なんとか間に合わせました。窮すれば通ずるとか、なんとかなるものですね。その後農家の方にわら草履の作り方を習い、それを履いて通学したものでした。

お風呂も農家の方の家に入れていただき、人の心の温かさにふれ、貧しいながらも心はとて有り難く豊かでした。

大垣へ転居

六年間住んだ揖斐川町を離れ、子供の教育のためには大垣に住んだ方がよいだろうとの叔父のことは、叔父の家の一間を借りて同居することになりましたが、子供のいない叔父たちとの同居は無理で、一年余りで小さな家を借り、ようやく一軒の家に住むことが出来るようになりました。引き揚げて以来の日本でのどんな底生活から、少しは上がりかけたところでした。

私は小学校の給食のおばさんに

家計を助けるために初めて勤めに出ることになりました。生徒数千二百人の給食の仕事は朝早くから大忙しでした。大きな竹かごに何キロという野菜を運び切るのです。裁断機は一つありましたが、ほとんどが手で切ります。カツなどの揚げ物は大きなお鍋に油を熱し、金網のザルにたくさん並べ、一度に油に入れ一つ一つひっくり返し、また一度に揚げるのです。それをクラス別に給食用バケツに分けて入れ、棚に並べておくのです。ゴム長靴にゴムの前掛け頭には白い三角巾という出で立ち、終わると茶わんなど全部洗って片

づけるのです。このとき、私はここで働くのなら「調理士」の免許を取ろうと独学で勉強を始めました。同僚の方たちは「ここは頭なんかいらぬ。体で働けばいい」と反対されましたが、きつと役に立つと思いい、昭和三十一年どうにか調理士の免許を取ることができました。その後次々と食器洗浄機、乾燥機など入り、何かと重宝いたしました。でも三十二キロの体重の私にはやはり重労働で、体をこわし四年半余りで退職しました。

主人の病死

幸せは長く続きませんでした。主人が昭和三十四年七月十二日「小脳血管腫」の手術を岐阜大学病院でしていたきましたが、七十六時間人工呼吸（そのころはまだ本当に人の手でゴムまりのような物を押し）の末、帰らぬ人となってしまったのです。四十五歳でした。当時長女は高二、次女は高一、長男中一、次男小四でした。私はだれもない所で思い切り泣いてきました。

後は泣いている場合ではありません。二度目のどん

底生活に舞い戻り、お葬式の費用も主人の同僚の方が貸してくださるといふ親切な心に打たれ、子供たちと相談し、長女、次女は定時制高校に転校し、昼の間働いて家計を助けてくれました。以下、長男も次男も定時制高校で学び、昼働いて助けてくれました。私もその後、主人の友人の眼科医院に、受け付け兼見習看護婦兼雑役として四年半余りお世話になりましたが、帰りが夜の九時を過ぎますので、子供たちにもかわいそうだと思います、これも四年余りでやめました。いつも家まで暗い道を十五分かかって歩いて帰るとき、当時はやった、故坂本 九ちゃんの「上を向いて歩こう涙がこぼれないようにー」と口づさみながら帰ったものでした。

託児所の保母として

その後、近江絹糸の女工さんたちが預ける託児所へ勤めることになりました。かわいい赤ちゃんばかり二十数人を三人で見るとは。三交代でしたが私は昼勤務にしていただけ、天使のようにかわいい赤ちゃんたちとの暮らし、楽しい毎日でしたが、けがなどさせて

は大変なので目が離せません。そのころの赤ちゃんだった人が昨年尋ねて来てくださいました。もう二十九歳になっていました。嬉しい再会でした。そんなとき、私は運悪く、盲腸炎になってしまい手術をしていただきましたが、術後が思わしくなく勤めは無理とのこと、またまた退職ということになり、少し休養しました。

子供たちのその後

長女と次女は、保母の学校へ通い、保母になり、長女はまだ勤めています。次女も幼稚園に勤めましたが、家庭でよその子供さんを預かって過ごしました。長男は奨学金を借りあらゆるバイトをしながら、大学を出て高校教師になりました。次男は高校のみで会社へとそれぞれ世帯を持ち、独立してくれました。

家庭保育を

私も体調もよくなりましたので、今度は家でよその赤ちゃんを四、五人預かり、家庭保育をすることになりました。産休明けから三歳くらいまでの赤ちゃんです。ほんとに天使のようにかわいい赤ちゃんとの毎日、

ダンボールの箱の中につぶれないようにまたダンボールを入れ外側には、それぞれ子供たちが画いた絵を私が布にアップリケして箱に貼り、幾つか作り積木ふうにして、お家になったり橋になったり、少しぐらい打つてもけがをさせし、とても楽しく遊びました。また、B紙のような大きな紙に一人寝せて、その子の周りをクレヨンで形どり指で色を塗るのです。順番を待つのが楽しくてたまらないようでした。そのころの子供さんがついこの間、また、「おばちゃん！」と姉弟二人がお母さんと一緒に尋ねてくださったのです。私はその子たちによって助けられ、また、その子たちは、「おばちゃんのお陰で！」と当時の写真を見て懐かしさの余り私は、涙が流れました。尊い心の再会でした。

男親のいない生活

父親のいない家族が生きて行くには、世間の風当たりは厳しいものでした。私は不甲斐ない母親でしたので、子供たちに苦勞をかけてしまいました。親も子も一緒に懸命生きてきました。でも世間はそう甘くありませんでした。一番くやくしく悲しかったことは、子供の

就職のときでした。「男親のない子は採用しません」ということでした。片親しかないので一生懸命学び働いてきましたのに、と。でも「特別頼んで入れてあげましょう」と御親切に言ってくれましたが、それでは勤めている間中「特別入れてあげた！」がつきまとい、子供がかわいそうに思い、「申し訳ありません」と程よくお断りし、皆、独力でそれぞれ仕事に就きそれぞれ世帯を持ち、たくましく生きてくれました。

長男と同居

十年余り家庭保育をしながら、何とか大垣の地で周りの皆さんに助けられて過ごすことができ、思い出深い地になりました。長男が高山に転勤になりましたので、息子は、「もうそろそろ仕事をやめて、一緒に高山で暮らしてくれないかな」と言われ、「あ、これ私の責任は果たせたのだろうか」と思いました。思えば長い長い浮きつ沈みつの道のりだったと初めて自分の歩いて来た道をふり返ってみました。一人千円から始まった日本での生活、家中探しても十円もないときがあっても、貧乏だ、みじめだ、と思ったことは一度

もありませんでした。何とか今を切り抜けねば、と考
えました。そして子供と共に努力しました。そして周
りの皆さんの温かい心のお陰で、主人亡き後の三十数
年間も尊く楽しい思い出として心に残っています。内
孫たちも成長し、夫婦教師の我が家も、私にやっと自
由な時間を与えてくれるようになりました。高齢者大
学、大学院に入り、まだまだ学ぶことがたくさんあり、
また、その中で引き揚げてきた仲間とも五十年たった
今、巡り合って、生死の境をさまよい歩いたことも、
今は楽しい思い出として語れる友も増え、またとでき
ない体験をし、この尊さに心も体も豊かに一緒に生き
延びた、長男ときつときつと心は結びついていること
を私の唯一の誇りとしており、また中国の友もいます。
私は、今幸せいっぱいです。

【執筆者の横顔】

後藤さんは大正八年長春の近く公主嶺で生まれたが、
父親が満鉄付属地を管理する地方事務所（治外法権を
もつ租界と同様）に勤務していた関係で、女学校に入

るまでに四回も小学校を転々とし、女学校に入学した
昭和六年満州事変勃発、その後満州国建国など目まぐ
るしい変化の中に身を置きながら、昭和十六年結婚し
て佳木斯に住む。

昭和十七年に長女、十九年次女が生まれ幸せな生活
も束の間、十九年秋、北滿の地チチハルに転勤になり、
翌二十年終戦を迎えた。その後一年混乱の中での生活
は自立自営、二十一年八月引揚げの通知をうけての喜
びよりは強烈で泣いた。

チチハルから無蓋車に乗ってコロ島まで一カ月余り
かかり、乗船して博多に着き日本の土を踏んだ昭和二
十一年十月長男を出産、引揚げと長男の誕生に両親は
二度びっくりの幸せと喜んでくれた。

祖国日本にたどり着いたが、満州生まれの身にはこ
こでも異邦人、ただ頼りになるのは家族、次男も生ま
れ、やつと落ち着きかけた三十四年七月、頼りにして
いた御主人は病気で帰らぬ人となった。

高二の長女、高一の次女は定時制に転校、長男中一、
次男小四だったが二人とも高校は定時制に学び、昼間

働き家計に協力した。

女手一つで四人の子供をかかえての奮闘、幾多の苦勞を乗り越え、皆それぞれお互いの立場を理解し合い助けあつて子育ての大役を終わり、長男夫婦と同居、孫たちにかこまれ幸せな毎日を過ごし、また、高齢者大学、大学院に通い、たくましく朗らかに生きる英子未亡人である。

(社)岐阜県引揚者団体連合会

理事長 川村 一正)

義勇軍中隊長として

生徒を引率

岐阜県 田 中 鈴 夫

私は大正四年十一月、岐阜県土岐郡泉町の自作農の長男として生まれた。父は私に望みを託して旧制中学校に進学させてくれた。しかし当時は農村恐慌の時代、不景気のため、ついに退学の余儀なきに至った。恩師

は私を惜しみその努力により、一年遅れて復学することができ、卒業した。当時は優秀な生徒の多くが、軍人関係の学校に進んだが、私は片耳の聞こえが遠いため断念、学資のいらぬ岐阜県師範学校に進んだ。

入学して間もなく、頼みにしていた父が死亡。親類その他の援助により卒業し、小学校教員となった。そんな環境に育ったせいにか、恵まれない子供に格別に目をかけて教育に当たってきた。

たまたま太平洋戦争の熾烈しだつな昭和十八年、私が小学校教員になって八年目、土岐郡土岐津国民学校教諭として六年生を担任していた。周囲の人々は友を含めて、どんどん召集をうけていった。受持ちの子供にも出征兵士の家庭が次第に増えていった。

そんな慌ただしい中、満蒙开拓青少年義勇軍の指導員の募集の話聞いた。独身の気軽さも手伝って、何とかしなければと考えていた矢先、どこから聞かれたのか、土岐地方事務所から教学指導員で行ってほしいとの話があったが、なかなか決心がつかなかった。

ところが昭和十八年の暮れ、土岐地方、事務所の兵